ウルグアイ通信

(2)「市民の足」にみるバリアフリー

上席主任研究員 水野 映子*

＊2018年１月より当研究所を休職し、JICA ボランティアとして、ウルグアイの観光省にてアクセシブル・ツーリズム（障害の有無や年齢などにかかわらず誰もが楽しめる観光）に関する活動に従事中。詳細は前号（http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/pdf/ldi/2018/wt1805b.pdf）参照。

ウルグアイには鉄道がほぼないため、国内の移動手段はバスか車が中心になります。私が住む首都モンテビデオでは、バス網が縦横無尽に張り巡らされています。また、主要な都市間を移動するための公共交通も主に長距離バスです。

私自身も平日は毎日バスに乗って通勤しています。往復一時間以上を過ごすバスは、市民の日常生活や、そのアクセシビリティ（バリアフリー）の現状に触れられる身近な場でもあります。

モンテビデオを走るバスの車内では、次の停留所名を案内するアナウンスもなければ電光表示板もなく、車窓からは停留所名の表記も見えません。したがってバスを降りるためには、周りの景色やスマートフォン(スマホ)の地図を眺めて現在地を確認し、目的地が近づいたら降車ボタンを押します。私は、在住半年が過ぎた今でも、降りる場所を間違えることがしばしばあります。

停留所の形状は何種類がありますが、いずれにも時刻表はなく、表記されている情報は多くてもそこに停まるバスの路線番号と行き先、主な経由地くらいです。中には、スペイン語で「停留所」を意味する“PARADA”と書かれた棒が立っているだけのところもあります（写真)。

また、バスの路線は複雑であり、容易には把握できません。しかも、停留所では手をあげてバスを停めなければならないので、乗りたいバスの路線番号をあらかじめ把握しておく必要があります。専用のサイトやスマホのアプリで路線を検索することはできますが、紙の路線図はないとのことです。インターネットのない時代にここに来ていたら、今ほどバスに乗れなかったと思います。地元の住民らしき人でも、運転手や車掌、他の乗客に、バスの経由地などを聞いている光景をときどき目にします。日本の公共交通に慣れた私からすると、バスの車内や停留所でもう少し情報があれば、自分のような外国人、視覚や聴覚に障害のある人、パソコンやスマホを使いこなせない人、その他の市民にとっても役立つだろうと思うのですが、そういう要望は私が知る限りあまりないようです。

車いすを使う人などのバス利用を物理的な面で助けるものとしては、低床バスやリフト付きバスがあります（写真）。また、バスの乗り口から最も近い座席は、障害のある人や妊婦、60歳以上の人の優先席であることが表示されています。健康そうな若い人がそこに座っていることもありますが、お年寄りや体の不自由な人が乗ってくると座席を譲っています。車いすでバスに乗っている方を見かけたのは今までに二度だけですが、視覚に障害があると思われる方はよく乗車しています。彼らは乗る時に運転手か車掌に行き先を告げ、降りる前に教えてもらっているようです。

また、視覚に障害のある方が乗車しようとしている場面には一度遭遇したことがあります。その方は、停留所の前で周りの人に向けて、〇番のバスが来たら教えてもらえないか、と声を出していました。何人かがすぐに応じて一緒にバスを待っていたのですが、しばらくすると彼らの乗りたいバスが先に来てしまったので、次の人を探し始めました。そこで私は、スペイン語でのコミュニケーションには不安があったものの思い切って声をかけ、バスを待つ間に会話をしました。バスの乗り降りは難しくないかと尋ねたところ、難しいこともあるが、こうやって人に教えてもらいながら乗るのでそれほどは困らないとの回答でした。別の日には、聴覚に障害のある外国人観光客がバスの乗り方を周りの乗客に尋ねていましたが、その際にも声をかけられた人は身振り手振りを交えながら丁寧に説明していました。

日本の公共交通におけるアナウンスや電光表示板で提供される情報は、ウルグアイや他の多くの国と比べると非常にきめ細かくて親切です。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、外国語での情報提供もますます整備されていることでしょう。駅やバス停、車両などの物理的なバリアフリーも進んでいます。しかし、障害のある人やお年寄り、外国人などに声をかけたり手を貸したりする日本人が、ウルグアイ人ほどいるかどうかは疑問です。人の手を借りずにスムーズに移動できる環境を整えることはもちろん不可欠ですが、助けを要する人に誰もがすぐ手を貸せるようになることも、日本においては大切だと思います。

もっともウルグアイでも日本でも、一般市民の手の貸し方が適切かというと必ずしもそうとは言えません。例えば、視覚に障害のある人の腕をつかんで引っ張ってしまうような誤った行為をする人は、どちらの国においてもいます。適切なサポートの仕方を啓発・普及していくことは、国を問わず必要といえるでしょう。

※写真はともにモンテビデオにて筆者撮影

（ライフデザイン研究部　みずの　えいこ）